

もくじ Contents

- 3 特集1
平成22年度6月補正予算
- 6 特集2
夏休みイベント

- 10 市政だより
 - 住宅用太陽光発電システム設置補助制度
 - 地域材利用住宅リフォーム補助事業
 - 子ども医療費公費負担制度
 - 児童扶養手当の給付
 - 母子家庭高等技能訓練促進費
 - 地域公共交通の再編
 - 第9次津山市行財政改革

ほか

- 16 ふおとほっとるぼ
 - 第9回 広戸仙ふれあい登山大会

ほか

- 18 みんなのページ・ちゃい
 - お・た・よ・り
 - つやまっ子に贈る100冊の本
 - きらめく津山人
 - イラスト・絵手紙
 - 広報クイズ

- 21 としょかん

- 22 こどもひろば
 - みゅーじかる劇団 きんちゃい座
 - じどうかん

- 23 けんこう・そうだん

- 24 けいじぼん

- 30 くらし

- 32 Albumあの頃の津山

天保2年(1831)3月、家族とともに江戸に移った阮甫は、ひとまず鍛冶橋の津山藩邸に落ち着きました。

藩医とはいえこの頃の阮甫の生活は苦しいもので、時には湯銭にさえ困るほどでした。そこで、藩邸を出て八丁堀に家を構え、医院を開くことにしました。もちろん本業は藩医ですから、非番の時に町人の診察を行う程度でしたが、評判も上々で家計にもゆとりができたといわれています。

しかし、ようやく生活も落ち着いた天保5年(1834)の2月、神田佐久間町を火元に、3千人もの死者を出す大火事が起こります。阮甫の借家も類焼して、せつかくそろえた家財をすべて失ってしまったのです。

落胆した阮甫は再び藩邸に戻り、これまでの生活を振り返り「生活のためとはいえ、葉を集め、治療を施すことだけに日々を費やしてよいのだろうか」と考えるようになります。そして「自分のため、世間のためにも西洋の書物を翻訳して人々に紹介することに専念しよう」と決意したのでした。

それからは藩医の仕事の時以外は、ひたすら翻訳に没頭しました。火事の翌年の天保6年(1835)には、シーボルトの門人の伊東玄朴から依頼を受けて翻訳した『医療正始』の刊行が始まります。さらにその翌年からは日本で最初の医学雑誌『泰西名医彙講』の刊行を始めました。これはオランダ語の医学書から主要な論文を抜

洋学博覧漫筆

～阮甫の翻訳業～

き出したもので、緒方洪庵らも翻訳を手伝っています。出版資金を作るために阮甫は衣服を質に入れましたが、そのような時にも「世間の人々はまだ外国について学ぶことの重要さに気付いていないので、役に立たないことをしているように見えるかもしれない。しかし、国のため、学問のために尽くそうとひたすら勉強しているのだ。今一時の困窮など何でもない」と言って、自分の信念を貫いたのでした。

この後、阮甫の翻訳業は医学にとどまらず、語学や地理、歴史などの分野へ広がっていきます。そして開国へと時代が変化していく中で、人々に海外の情報を提供する大きな役割を果たしていくことになるのです。



▲『泰西名医彙講』(津山洋学資料館蔵)